

[シンポジウム：家族看護学への取り組み]

1. 家族看護学の課題

高知女子大学

井上 郁

1. はじめに

看護学の中の一つの専門領域として“家族看護学”を位置づけ、発展させていこうという動きが始まっているが、まだ完全に市民権を得るところまでは行っていないというのが現状ではないだろうか。ここでは、家族の定義、研究、教育と実践において、家族看護学が抱えている課題について考えてみたい。

2. 家族の定義に関する課題

看護者の中には、「家族看護は、今までも、また、現在も実際に行われている。“家族看護学”と言った名称を使って、教育や研究の場で一つの領域として認識されてこなかっただけで、実践の場では、家族看護は当たり前のことだ。」という人がいる。しかし、果たしてそうだろうか。そこには、対象としての“家族”の捉え方に違いがあるように思う。確かに、人間が何らかの形で“家族”と呼ばれる組織に属し、その“家族”が社会を構成する一つの単位である限り、人間を対象とした学問領域である看護にとって、家族という視点を抜きにしては考えられない。では、ここで言う“家族”とはいったい誰のことであろうか。家族をどう捉えるか、定義づけるのかに関しては、今までいろいろと議論されてきた。我々は“家族”という日常的な言葉は、いったい誰を指すために使われているのだろうか。外口は、家族は競争社会の“荒波”から互いを守り合おうとする“連帯感”によって結びついた私的な社会単位であると言っている。社会学や心理学、文化人類学

などいろいろな学問分野において、家族は、その構造や機能の視点から、いろいろに定義されている。では、看護が対象としてきたという“家族”とは誰のことなのだろうか。多くの看護者達が“家族”という言葉を使う場合、それは“患者”の家族を指している。この場合、家族は患者にとっての背景であり重要な人的環境として捉えられる。また、家族員が“患者”になることによって起こってくる家族の問題に対して看護ケアを行うこともあるだろう。この場合も家族は、患者の家族である。家族に対するこれらの捉え方は、“患者の家族”或いは“患者と家族”という二極的な視点と言えるだろう。

“家族看護学”の言う“家族”とは何だろうか。家族看護学では、一つのユニットとしての“家族”，その中に病者や障害者がいるかも知れないし、ないかも知れない、そういう集団を対象とした看護活動だと思う。つまり、その中には、“患者”の家族もそうでない家族も含まれているし、また、家族は、患者をも含めた集団である。この視点は、家族看護学が、新たに提示しようとしているものであり、そのことで、看護にとっての家族の捉え方に広がり多様性が生まれることが期待できるのだと考える。そして、まだ明確な答えは出されていないと考えられる「集団である“家族”を一つのユニットとして捉えるとはどういうことなのか」という問いに対する答えを模索していると言えるのではないだろうか。

3. 家族を対象とした研究に関する課題

このように、家族看護学を考えるに当たっては、

家族の捉え方に関する課題があると同時に、家族看護学の領域における研究の方法論的な課題も出てくる。家族看護学の領域では、一つのユニットとしての“家族”を対象として研究が行われる。とすると、例えば、要介護老人のいる家族を対象に、一人一人の家族構成員のではなく“家族”としての介護に対する満足感について研究しようとした時、どのような研究方法が考えられるのだろうか。一人一人の家族構成員の満足度の総和を一つのユニットとしてのその“家族”の満足度と考えてよいのだろうか。或いは、一人一人の家族構成員の満足度の平均をそう考えてよいのだろうか。これらの考え方に妥当性があると言えるのだろうか。これは、家族だけではなく、集団を一つのユニットとして、研究の対象にしようとするときに、共通して起こってくる問題であろう。

集団としての家族を対象とした事例の分析やグループのダイナミクス、インタラクションを分析した研究が報告されている。これらは、その研究成果そのもの以外にも、集団を一つのユニットとして研究対象にしようとするときの研究方法として、多くの示唆を与えてくれている。しかし、家族を一つのユニットとして捉えた研究は、まだ十分に行われているわけではない。多くの研究報告において、家族という言葉が使われているが、その“家族”は家族構成員の中のある特定の人物を指していることが多く、家族看護学で言われる“家族”という概念からすれば、ある一部分を対象にしているということになるだろう。家族看護学を専門にしようとしている人々だけでなく、家族に関する研究をしている者にとっても、果たして妥当性のある研究方法が考えられるのか、或いは、どうすれば妥当性のある研究方法が開発できるのかということは、重要な課題であろう。

また、家族は、静止している存在ではなく、常に発達し、変化している存在として捉える必要がある。家族の成長や変化は、その構造面にも機能面にも起こる。家族を対象に研究を行うとき、それらの発達

や変化をどのように捉えることができるのか、或いは、それらの発達や変化を含めて研究するためには、どのような方法が考えられるのか。これもまた、家族に関する研究をする者にとって、重要な課題と言えるだろう。

4. 家族を対象とした教育と実践に関する課題

看護教育に関する課題としては、家族看護学の内容や教育方法に関わるものもあるが、家族看護学を専門領域とするスペシャリストの育成に関わる課題もある。家族看護の対象として、成人も老人も小児も、健康者も病者も全ての人々を含む“家族”を考えた時、家族看護学を専門領域とするスペシャリストが発揮する専門性とは、具体的にどのようなものであろうか。その専門性を身につけるための教育として、どのようなものが考えられるのであろうか、或いは、必要なものであろうか。家族看護学が実践の場における一つの専門領域として独立して機能していくためには、成人でも老人でも小児でもなく、また、健康者でも病者でもなく、それら全てを含み得る“家族”を対象とすることの実践的な利点を社会的にも認知されるように明確に示していくことが必要であろう。教育の場におけるチャレンジは始まったばかりである。その答えは、看護実践の場における一つの専門領域としての家族看護学の確立は、家族看護学スペシャリストのコースを卒業した看護者達が、パイオニアとして、どのような場でどのような役割を担っていくのかにかかっているのかもしれない。

5. おわりに

人間を対象とした学問領域である看護にとって、その人間の集団である家族という視点は、必要不可欠なものである。家族看護学を論じることは、高齢社会といわれ、在宅看護が注目されている中で、単に高齢者や在宅療養者にとっての介護者として家族に

注目するのではなく、社会を構成する一つの単位としての“家族”の、看護にとっての意味を問い直すためにも重要なことであろう。実践、研究、教育、それぞれの場で、家族看護学を育てていく動きが始まっているが、家族看護学にとってのコア、つまり他に譲れないものとは何なのかという問いに対する誰もが納得できる答も、まだ出されていないのでは

ないだろうか。他の専門領域といわれる看護分野や、他の学問領域との関わりの中で、一つの学問領域としても、また、看護実践に関わる技術としても、明確にしていかなければならないことであろう。

引用文献

- 1) 外口玉子：変貌する家族と求められる新たな福祉政策，
家族看護学研究, 1(1), 22-28, 1995.